

CLINIC
ばんぶう

開業医をサポートする総合情報誌

BAMBOO

February
2021.2
Vol.479

[第1特集] 絶対労働問題にはさせない!!

先駆者の事例に学ぶ スタッフトラブル対策 &予防策

[第2特集] その勝ち筋を探る

ウイズコロナ時代の分院展開



映画から考える
在宅医療の課題と今後の展望

人生の目的は楽しむこと
在宅医の役割は、患者さんの
楽しみや笑顔のサポートだ



町医者として24時間365日の診療を実践しながら、多くの著書やメディアを通じて国民へ医療の現状と課題を伝えている医療法人社団裕和会理事長の長尾和宏氏。その著書「痛くない死に方」が実写映画化され、今年2月に公開される。患者のQOLはもちろん、医療提供体制の観点からも重要な在宅医療。医療界では定着した感があるが、患者や家族にとって未体験領域であり、いまだ浸透していない。在宅医療を浸透させるには何が必要か。映画で在宅医を演じた俳優の奥田瑛二氏、原作者である長尾氏、さらには医療法人悠翔会理事長の佐々木淳氏に語り合ってもらった。

カルテではなく人を見る

——映画『痛くない死に方』では、長尾和宏先生の体験をベースに、在宅医療におけるさまざまな課題が描かれています。奥田瑛二さんは長尾先生をモデルにしたベテラン在宅医を演じられましたが、在宅医をどのように捉えて撮影に臨まれましたか。

奥田 在宅医というよりも「町医者」をイメージしていました。町医者とは、私の親世代がなんでも相談していたような身近な存在で、幼いころ、「町を助ける」「人を守る」存在として尊敬していました。近年あまり見かけなくなつたなと思っていたのですが、長尾先生たちの活動を知つて、「やつぱり地域にはいたんだ」と納得しました。

演じていてとりわけ重要視したのは、主役である柄本佑さん演じる若い医師に、在宅医療の心得を諭す場面です。「カルテではなく人間を見ろ」という台詞を、「医師として、人としてきちんと見えるかどうか」。これが最大のテーマになりました。演じてみて、在宅医療とは本当に「医師と患者が人

対人でかかわり合つていくことだ」と感じましたね。

長尾 「町医者」とのご指摘がありましたが、私は町医者を自認しています。町医者も在宅医も、医療を提供するに際して患者さんと

の信頼関係が最も重要なことです。

これに関して私は、初診時にしっかりと患者さんに向き合うことの大切にしています。そのため、出会つてすぐ診察に入ることはあ



『痛くない死に方』

「病院」か「在宅か」この物語は患者と家族、そして医者の物語。

在宅医療のスペシャリスト・長尾和宏のベストセラー「痛くない死に方」「痛い在宅医」を、高橋伴明監督が映画化した。柄本佑が主人公の在宅医師・河田仁を熱演。痛みを伴いながらも延命治療を続ける「入院」ではなく、「痛くない在宅医」を選択した患者が、自分の最終的な診断ミスにより、苦しみ続け生き絶えるしかなかったと悔恨の念に苛まれ、「カルテ」ではなく「人間」を見る在宅医に成長する姿を描く。長尾和宏をモデルにした先輩在宅医の役をベテラン俳優の奥田瑛二が好演。

出演者：柄本 佑 坂井 真紀 余 貴美子 大谷 直子 宇崎 竜童 奥田 瑛二 他

監督・脚本：高橋 伴明

原 作・医療監修：長尾 和宏

製 作：内規 朗、人見 刚史、小林 未生和、田中 幹男

プロデューサー：見留多 佳城・神崎 良・小林 良二

医療協力：遠矢 純一郎、井尾 和雄

制 作：G・カンパニー 配給・宣伝：渋谷プロダクション

製 作：「痛くない死に方」製作委員会

公式サイト：<http://itakunaishinikata.com/>

©「痛くない死に方」製作委員会

2021年2月20日(土)シネスイッチ銀座ほか全国順次公開

映画から考える 在宅医療の課題と今後の展望

りません。まずは話をじっくりと傾聴し、趣味や結婚・親子関係など、人生の歴史を振り返りながら、その方自身のことを深く知つていいく。ここでは、「この医師にならいいこんなことが言いやすい」と思つてももらうことが重要です。患者さんの気持ちをほぐすためだつたらありとあらゆることを試します。

佐々木 確かに、在宅医にとっての基本は患者さんとの信頼関係ですね。そのために医師は、話す内容や声のトーンはもちろん、かかる際の存在感そのもので信頼を得られるようにしなくてはいけません。「愛」の反対語は「無関心」だと言いますが、「紹介状で症状はわかつてているので薬を出します」とすぐ終えるようでは駄目。まずは患者さんに関心を示し、いろんな話を聞くなかで、「いざとなつたらこの人に相談すればいい」と実感してもらうことが大切です。

また、24時間365日体制で在

り複数医師によるチーム医療も不可欠です。これを実践するために、自分が診察に行けない場合でも、「先生が言うのなら」と代わりの医師や看護師が行つても信頼されるような状況にしておくことも大切です。

長尾 同感です。地域医療の継続性を担保するために、自分の代わりに診察を任せられる仲間をつくつておくことも在宅医の大仕事なう。

佐々木 とても大切ですね。東京大学高齢社会総合研究機構の研究によると、高齢者の8割は何かがきっかけで健康を崩し、そこから病気を繰り返し健康状態が落ちていく疾病モデルをたどることがわかっています。これをフレイルサイクルというのですが、この負のスパイラルを起こす背景には「食事量の低下」があります。高齢者の場合、死亡リスクが一番低いのはBMIが27ですが、日本では高齢者に対する若い人と同様の食事制限を押しつける傾向があります。

奥田 「生きることは食べることだ」という台詞は強い印象を残します。在宅医療での食事の重要性を表していますが、奥田さんはどのような思いでこのシーンを演じましたか。

奥田 これは、一番大変な台詞で、7回ほどNGを出してしまいました。この台詞が作品のテーマだと思つて意識していたのかもしれません。しかも、役としてはその台詞一行だけ言えても駄目なのです。それを言葉にする私の居ずまいが在宅医でないと。先生、実際

の医療の現場でも、「食べること」は大事だということですね。

佐々木 とても大切ですね。東京

大学高齢社会総合研究機構の研究

によると、高齢者の8割は何かがきっかけで健康を崩し、そこから病気を繰り返し健康状態が落ちていく疾病モデルをたどることがわかっています。これをフレイルサイクルというのですが、この負のスパイラルを起こす背景には「食事量の低下」があります。高齢者の場合、死亡リスクが一番低いのはBMIが27ですが、日本では高齢者に対する若い人と同様の食事制限を押しつける傾向があります。



長尾和宏

ながお・かずひろ 1984年、東京医科大学卒業。大阪大学第二内科等を経て、95年、長尾クリニック開設。複数の医師による連携で、年中無休の外来診療と24時間体制の在宅医療に従事。日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長など多数の公職も務める

近年の日本の医療では、入院する
と管だらけにされ、口から食べさ
せてもらえないくなる。特に、コロ
ナ禍での入院の場合は、そのよう
な患者さんが日本中にあるはずで
す。

在宅医療の側から見ると、食べ
ることの大切さが今は忘れられて
いると思いますね。

在宅医療と入院の狭間で 揺れ動く家族をサポート

——映画には、在宅看取りを考
えていた患者さんの家族が救急
車を呼び、結局、病院に入院し
てしまう様子が描かれます。同
様のケースはよくあると思いま
すが、どのような対応がありま
すか。

佐々木

患者さんの症状が急変す
ると、ご家族は「病院に行けば何
とかなるかも」と考え、救急車を
呼ぶケースは時折あります。そう
しなかつた場合、「あのとき入院
していれば結果が変わっていたん
じやないか」と後悔することを考
えると、やむを得ないとも思いま
す。

元来、日本では、患者は病院で
治療することが一般的で、家族は

在宅で「看取るかどうか」という判
断や覚悟をしてこなかつたので、
迷うのは当然です。だからこそ、
迷うのは自然です。だからこそ、
ナフードでの入院の場合は、そのよう
な患者さんが日本中にあるはずで
す。

在宅医療の側から見ると、食べ
ることの大切さが今は忘れられて
いると思いますね。

在宅医療の側から見ると、食べ
ることの大切さが今は忘れられて
いると思いますね。

——映画には、在宅患者さんの入院は往々
にしてあります。本人の意思に寄
り添えていかなかったと感じたら、
自分の未熟さを反省しますね。そ
のようなときは、そうさせてし
まつた自分を反省しますね。そ
ならないように普段からどうかか
わつていてけるか。そこが在宅医の
大きな役割だと考えていて。

奥田

患者さんが入院してしまつ
たとき、在宅医としての、誰かに
心を盗まれたような喪失感は、演
じていてもショックでした。「な
ぜだ」とため息にもならない悔し
さがあり、そうした出来事と日々
直面する医師という立場のご苦労
を改めて感じましたね。

自宅での看取りを 医者はどう支えるべきか

——日本では、老いや病気、死
は「縁起でもない」とタブー視さ
れてきました。そのため、「自分
がどのような最期を迎えたいか」
を家族や親しい人に伝える習慣
はなかつたように思います。映
画では、ACPにも触れ、「どう
死ぬか」「どう生きるか」を改めて
考えさせるものとなっています。
在宅医として、患者の最期をど
う支えるべきだと考えています
か。

佐々木

病院を中心とした医療で
は、「治らない病気だ」と言われ
ると、ほとんどの人がやりたいこ
とを封印して医師の言いなりにな
り、人生を手放さざるを得ないの
が現状でした。つまり人生の最期
を医師に支配されてしまっている
のです。しかし、在宅医療はそ
ではありません。「家に帰る」と
決めた時点で患者さんは、「どの
間で誰に会いたいか」「残りの時
間で誰に会いたいか」と考えます。
それを、残された時間と体力とお
金の中で、サポートするのが在宅
医療のあり方だと思います。

「治せる可能性を手放すこと」は、
「治らない」という運命を受け入れ
ること」で、確かにつらいことで
す。でも、早いうちにそういう割り切



佐々木 淳

ささき・じゅん ●1998年、筑波大学医学専門学群卒業。
三井記念病院内科／消化器内科、東京大学医学部附属
病院消化器内科等を経て、2006年、在宅療養支援診
療所(MRCビルクリニック)を開設。2008年、医療法人
社団悠翔会に法人化、理事長就任。都内近県合わせて
15拠点を構え、24時間対応の在宅総合診療を展開する。

映画から考える 在宅医療の課題と今後の展望

佐々木 患者さん本人と家族が、最期のときのあり方を決めるACPについても、会議のように「どのように死ぬか」を決めるのではなくて、一緒に飲んだりもします。在宅医療を続けていた優れた先生たちはたいていそうなるでいくようです。

Pについても、会議のように「どの

く、患者さんとの交流から、「この人はこういう風に亡くなりたいんだな」と自然にわかるほうが良い気のくらいになるときの希望を優先順位や「くなるときの希望を話せる関係でいることが求められるのです。

私は、もし患者さんが「最期は酒を飲みたい」と希望したら、「どうくらいい飲めるか」と相談できる医師でありたい。在宅医療ならそれが可能だと私は考えています。

この映画は、患者さんの酒や煙草を一概に「認めない」と言っていた若い医師が変わっていく、最終的にはそれらを受容していく成長の物語でもあります。そのように進化できる医師でありたい。言つてしまえば、人生の目的は「楽しむこと」。在宅医の役割は、そうした患者さんの楽しみや笑顔をどのくらいサポートできるかが大事。だから、私たちも患者さんの楽しみのためだつたらなんでもありますよ。一緒に飲んだりもします。在宅医療を続けていた優れた全国の先生たちはたいていそうなるでいくようです。

長尾 この映画は、患者さんの酒や煙草を一概に「認めない」と言っていた若い医師が変わっていく、最終的にはそれらを受容していく成長の物語でもあります。そのように進化できる医師でありたい。言つてしまえば、人生の目的は「楽しむこと」。在宅医の役割は、

く、患者さんとの交流から、「この人はこういう風に亡くなりたいんだな」と自然にわかるほうが良い気のくらいになるときの希望を優先順位や「くなるときの希望を話せる関係でいることが求められるのです。

私は、もし患者さんが「最期は酒を飲みたい」と希望したら、「どうくらいい飲めるか」と相談できる医師でありたい。在宅医療ならそれが可能だと私は考えています。

この映画は、患者さんの酒や煙草を一概に「認めない」という意見がありますが、そのようなことはないのではないか。時からすでにACPが始まっています。そういう言い方もできます。「初診の診時は信頼関係が醸成されていないからACPができない」という意見がありますが、そのようなことはないのではないかでしょう。

—在宅医であるお二人のお話を聞いていると終末期の捉え方も深まるような気がします。

奥田 要は、「最期に自分がどうしたいか」ですよね。そこに人と人のかかわりがあつて在宅医がサポートしてくれる。私も、「人生の最期をどう迎えるか」は、45歳位のときに決めました。臨終の際、家族の前で、右手が拳がつたら「幸せな人生」、左手だと「不幸せ」、どちらも挙げなかつたらまあまあ（笑）。声が出せない場合も想定して、そんな風に意思表示を決めています。もうすでに遺書や遺言もつづっており、墓も戒名も用意済みです。「棺桶は桐の無垢材にして、娘と孫に鳥の絵を描いてほしい」とも家族には伝えていました。

それと、この映画に参加して「在宅で最期を迎えたたら良いな

とも思いました。

—在宅医療という言葉は、実際の医療現場での浸透度はどのくらいなのでしょうか。

佐々木 まだまだ不十分ではないでしょうか。啓発イベントでも意識の高い人しか来ない現状があるので、この映画のような間口の広い娛樂で、実際の様子を伝えていくことは意味のあることですね。

長尾 今、国は総力をあげて在宅医療の推進をしてくれてはいますが、まだまだ道半ばのような気がします。ひとつ補足したいのは、終末期の在宅患者の看取りは、家族がいる人だけではないということ。今、私は、お一人様のための在宅医療や看取りも多く担当しています。天涯孤独であつても、その人なりの最期がそこにあります。このように、誰に対しても広く、在宅医療につなげていきたいと考えています。

奥田 「カルテではなく人間を見ろ」という台詞通り、在宅医療には、人を好きになる、知ろうとする支え方があるのだとわかりました。この映画で、そのような在宅医療のありようをぜひ感じてもらいたいです。

—ありがとうございました。



奥田瑛二

おくだ・えいじ 1979年、日活『もっとしなやかに もっとしたたかに』で主演に抜擢される。86年『海と毒薬』で毎日映画コンクール男優主演賞受賞。89年『千利休・本覚坊遺文』で日本アカデミー主演男優賞。94年『棒の哀しみ』では8つの主演男優賞を受賞する。01年からは映画監督としても活躍している。